

今年度の野田中学校には、初任者がいる。教員の場合は、初任者という。民間会社でいえば新入社員である。さすがにフレッシュな感じがする。

彼は、3月までは大学生だった。教科は英語である。大学を出て就職をするのは世の中では当たり前のことである。だが、教員の場合は、それがなかなか難しい。教科にもよるが、特に中学校と高等学校は狭き門である。

4月1日が勤務初日であった。彼の動きを見ていた。決して観察していたわけではない。全体を見ている中に彼の姿があった。まわりを見て、何をすべきかと、とにかく動こうとしていた。まわりが見えるのは大切なことである。

3学年の副担任というポジションが、彼のアクションを難しくさせていた。担任であれば、自分の学級のことを最優先でやっていけばよいが、副担任となると、そうはいかない。学年全体を見渡して学年主任の指示のもと動かなければならない。入学式の会場準備では、全体を見渡して動かなければならない。

彼を見ていると、あたふたしていない。空回りもしていない。どちらかというスマートである。少なくとも私にはそう見える。とはいえ、本人はそうではないと思うが。まわりが見えることと気が利くことは重要である。徐々に慣れてきたとはいえ、まだまだ戸惑っていることが多いだろう。

いつだったか、彼が「英語の授業が心配です」と言っていた。私は「それでいい。いろいろな仕事があるが、英語の授業が最優先だよ」と話した。初任者である学校の先生が、一般の新入社員と大きく違うのは、いわゆる研修期間がないことである。教育実習を経験しているのだから、それが見習い期間ともいえる。だが、現実は大いぶ違う。

いきなり、英語の授業を一人で担当するのである。誰もサポートはしてくれない。心配というレベルではなく、正直、こわいだろう。恐怖を感じるはずである。生徒にとっては、ベテランだろうが1年目の初任者だろうが、先生は先生なのである。彼が担当する学級の英語に関しては、彼に全責任がある。

彼には、授業が心配という感覚をいつまでも持っていてほしい。授業への恐怖を感じてほしい。心配でこわいから入念かつ周到な準備をするのである。それが計画的な授業へとつながる。自分がいうセリフ、教員の用語でいえば、発問や指示を暗記するのもわるくはない。

さて、彼の授業を見に行くのをいつにするか。教室の後ろに校長が立っているだけで、かなりのプレッシャーだろう。もうしばらく様子を見るのが、思いやりか。それとも早いうちに授業を見てアドバイスをするのがいいのか。

30年以上経った今でも、自分が初任者だった頃の感覚は残っている。初めて教壇に立ったときの恐怖感忘れられない。そんな自分を笑顔で見ている子どもたちのまなざしも覚えている。まるで何かを期待するような目だった。

彼にとって、この1年は大きい。何事も最初が肝心である。彼の様子を見ながら、タイムリーにアドバイスができればと考えている。30年前の未熟な自分を思い出しながら。